

---

# 照葉と未苗

辰野さとり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

照葉と未苗

### 【Nコード】

N8007Z

### 【作者名】

辰野さとる

### 【あらすじ】

千字前後の百合短編の連作（予定）。照葉<sup>てるは</sup>と未苗<sup>みなえ</sup>という女の子の、不安だったり希望だったりがちらほら見える日常のお話。名言や逸話を拾ってきて、それを軸にした話作りを心がけるとおもいます。

## ひとりきり（前書き）

ほのかに百合。女の子が『一緒にいる』というところの重点を置いた感じです。恋愛ものと友情ものの間で、恋愛寄り？ ぐらいです。

## ひとりきり

定期テスト前。

照葉と未苗は、一緒にこたつに入って問題集を解いている。こたつの温度は少し低め。未苗の家のこたつは小さくて、お互いの体温がほのかに感じられる。

「うー、わたしも照葉ちゃんみたいに勉強できたらなあ」

未苗はぺたん、と机に突っ伏してしまう。長い間考えているのは苦手だった。

「私になっても仕方ないわよ。例えば、そうね。ガーシュウィンとラヴェルの話をしましょうか」

「だれ？」

「作曲家。ガーシュウィンは独学ですごい作曲家になったんだけど、やっぱりプロに教えてもらいたいと思ってたの。それで、有名な作曲家だったラヴェルに教えてもらおうとしたんだけど、『あなたはもう一流のガーシュウィンなんだから、二流のラヴェルになる必要はないでしょう』って言われたのよ」

ちよつとは未苗の気分が晴れるかな、という照葉の期待とは裏腹に、未苗はさらに考え込んでしまう。

「ううん……」

「ちよつとわかりにくかった？」

「わかった！ それじゃあ、わたし『照葉ちゃんの恋人』じゃないね！」

「え、あの、どうして……？」

照葉の心に、ふわふわとした綿菓子のような、とらえどころのない不安が浮かぶ。

未苗は照葉にとって、憧れの女の子だった。元気で、可愛らしくて、純粹で。閉じこもってしまいがちな照葉と違って、未苗はどんどん先へと進んでいくことができる。

照葉が一番憧れていたのは未苗のそんな姿であり、恐れているのもそれだった。

心を砕いて紡ぎあげた、なによりも守りたいこの関係。それが、小さなきっかけで変わってしまうような気がして。

「ガーさんも、ラヴェルさんも、世界でただひとりきりなんだよ。恋人なら何人でも作れるけど、同じ子はひとりもない。考えたくないけど……照葉ちゃんの恋人になれる人って、わたしのほかにもいると思う。だけど、『照葉ちゃんの未苗』になれるのはわたしだけだね」

「……私の恋人は、これからずっと未苗だけよ」  
未苗にとつても、そうだったらいいな。

照葉は寒さに震える手で、こたつの中の未苗の手を握った。繋いだ手を通して、温もりを伝え合う。

目には見えないけれど、確かに二人は繋がっている。

「えへへ、ありがとう」

そんな、冬の日。

## てぶくろ(前書き)

こんなんぱっかりかよ？      こんなんぱっかりです！      たぶん！

## てぶくろ

指先から寒さが染み込むような冬の朝。

「手、つなごー!」

未苗に屈託のない笑顔で見つめられて、照葉は動揺してしまう。

「う、うん……いいよ」

付き合う前から、手を繋ぐ事は多かった。それはとても普通なこととで、当たり前前行為だった。

けれど、意識して手を繋ごうと思うと、どうしても上手くいかない。

結局、未苗の手を握ろうとして、照葉の手は空を掴んでしまう。

「照葉ちゃん、どうしたの?」

「ごめんなさい。私、どうやって手を握ったらいいのか、わからなくなっちゃって」

わたし、なんて情けないんだろう。照葉は内気な自分が嫌になつて、雪に覆われた地面を見下ろした。

知っている場所なのに、雪に覆われているだけで、踏み出すのがこわい。

「んー、きつと考えすぎなんだと思うよ」

「でも、考えないと、怖くて……なにか、間違えてしまいそうで」「ねえ照葉ちゃん、キスの仕方、知ってる?」

「知ってるけど、そんなの、わからないわ。したこと、ないし…

…」

照葉の心臓がはじけそうになって、顔を真っ赤に染める。

二人は付き合い始めて日が浅い。キスなんてした事がないし、照葉は未苗と一緒に出掛けるだけでも緊張してしまう。友達よりも遠ざかったように見えるほど。

けれど、二人の心の距離は付き合う前よりずっと近い。

「手を繋ぐのも、キスするのも、そんなに難しいことじゃないよ。

でも、考えてもわからないかも。だって、わたし手の繋ぎ方なんて習ったことないもん」

だからね、と未苗は続ける。

「してみればわかるし、してみないとわからないよ！ ほら！」

未苗は照葉の手をしっかりと握り、笑いかける。

照葉はガラスに触れるような慎重さで、分厚い手袋越しに未苗の手を握り返した。

「ね？ もう握れるでしょ？」

「うん……臆病で、ごめんなさい」

「臆病でもいいよ。そういうところも含めて、照葉ちゃんのこと、全部好きだから！」

ぱらぱらと、小さな花びらのような雪が舞い散る。

「私も、その、未苗のこと……全部好きだから」

照葉は赤くなつた顔をマフラーで半分隠したが、ただでさえ熱くなつていた顔がもっと熱くなつてしまった。

学校には、まだ着かない。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8007z/>

---

照葉と未苗

2011年12月25日19時59分発行